

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

| | |
|-------|-----|
| 都道府県名 | 青森県 |
|-------|-----|

学校の概要(平成15年4月現在)

| | | | | | | |
|-----|------------|-----|-----|------|-----|-----|
| 学校名 | 八戸市立小中野中学校 | | | | | |
| 学 年 | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 4 | 3 | 3 | 0 | 10 | 17 |
| 生徒数 | 104 | 113 | 109 | 0 | 326 | |

研究の概要

1. 研究主題

「確かな学力を育てる指導のあり方の研究」
 ~きめ細かな指導のための教材(ワークシート)作成と指導形態の工夫を通して~

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 3 学年・必修数学
TT加配がなされているため。
- ・ 2 学年・必修英語
唯一、同一教科内で3名の教師がそろっているため。
- ・ 3 学年・選択教科(国・社・数・理・英・音・美・技・家)
昨年度の反省を踏まえ、拡充を図るため。
- ・ 他の必修教科でも、主題に則した取り組みを適宜取り入れるよう全校的に努めてきている。

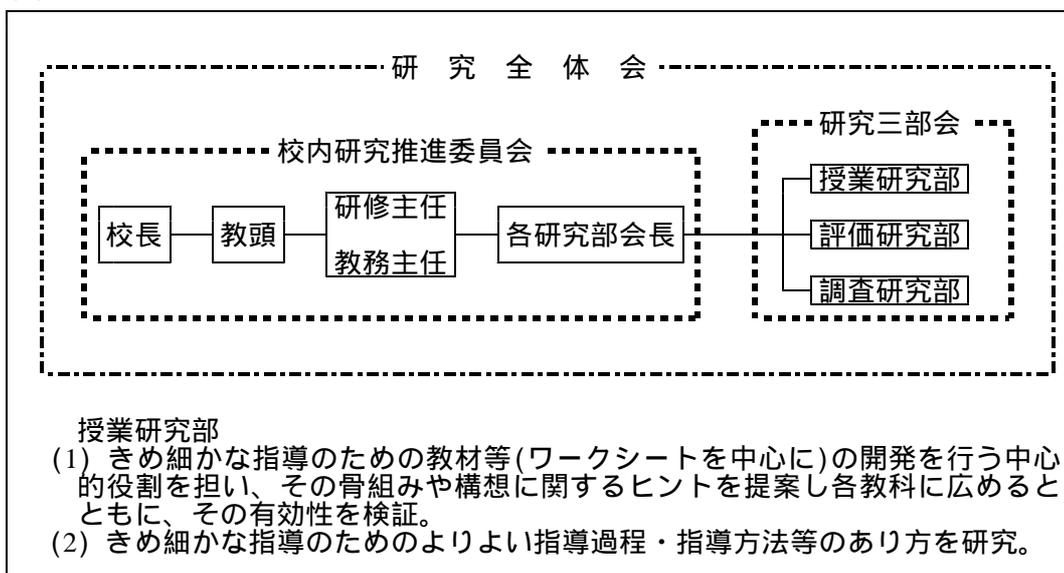
(2) 年次ごとの計画

| | |
|--------|---|
| 平成14年度 | <p>テーマ 確かな学力を育てる指導のあり方の研究 ~習熟の程度に応じた段階別教材・教具の開発を通して~</p> <p>研究の見通し(仮説) よりよい指導過程のあり方・TTの形態・習熟の程度に応じた指導のための教材や教具の開発などに工夫を凝らし、個に応じた補足的または発展的な学習のための指導をきめ細かに行うことで、確かな学力の定着と向上を図ることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 指導体制の工夫 協力型TTと分担型TTの二種類のTTを導入し、個別または少人数での活動を適宜取り入れながら指導することによって基礎的・基本的な学習内容の定着を図り、学ぶ力を育てる。</p> <p>(2) 教材・教具の開発 1単位時間の中で、または単元ごとに取り入れることのできる、習熟の程度に応じた段階別教材や教具を開発し、その妥当性を探る。</p> <p>(3) 評価の工夫 1単位時間または単元ごとのPDSサイクルの実践的研究に取り組む。</p> <p>(4) 指導過程の工夫 確かな学力の向上につながる、指導形態に応じたよりよい指導過程を追究する。</p> |
|--------|---|

| | |
|----------------|---|
| 平成 15 年度 | <p>テーマ 確かな学力を育てる指導のあり方の研究 ～きめ細かな指導のための教材(ワークシート)作成と指導形態の工夫を通して～</p> <p>研究の見通し 単元レベルでの評価基準表を生かしながら、生徒一人ひとりに対してきめ細かな指導を行なうことで基礎・基本の定着度合いを的確に把握し、その習熟程度に応じた学習を可能とするワークシートを作成し活用することで確かな学力を育てることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 指導体制の工夫 必修数学では1年目の成果を踏襲し、問題解決場面におけるつまずきの程度に応じた2つの習熟度別学習集団を1時間ごとに編成し、授業後半をTTで指導するという手法をとる。(ただし、単元や教材による) 必修英語では、各学級を均質な2クラスに分け、同一内容を2人の教師で少人数指導するという手法をとる。(ただし、単元や教材による) (2) 明確な評価基準表の作成 単元ごとの観点別評価基準表を作成し、評価活動の充実を図る。 (3) ワークシートの作成 評価基準表を活用しながら学力の補充が必要な状況や生徒を見極め、その指導に役立つワークシートを作成して授業の充実に役立てる。 |
|----------------|---|

| | |
|----------------|---|
| 平成 16 年度 | <p>テーマ 確かな学力を育てる指導のあり方の研究(サブテーマは検討中)</p> <p>研究の見通し 学力の定着度合いを測るための単元途中や単元末の評価問題(ペーパーテストだけでなく技能テスト等も含む)を作成し、その結果を単元レベルでの評価基準表と照らし合わせながら指導に生かすPDSサイクルをきめ細かに実践することで、確かな学力を育てることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 指導体制の工夫(これまでの数学TTと英語少人数指導を継続) (2) 明確な単元別評価基準表及び評価問題の作成 (3) 選択教科を活用した個に応じた指導の充実(補充的・発展的の両面で) (4) 学ぶ意欲を引き出す指導過程の工夫 (5) 学力把握のための方策の検討 |
|----------------|---|

(3) 研究推進体制



評価研究部

- (1) 評価規準・評価基準のよりよい設定の仕方について検討。
- (2) 基礎的・基本的学習内容が身についたかを客観的に評価する方法を研究。
- (3) 形成的評価の効果的な取り入れ方の工夫に関する研究を行なう。

調査研究部

- (1) 先行研究や参考となる他校の実践情報を収集し、研究全体会に情報提供。
- (2) NRT・CRT・定期考査等を中心とした諸検査結果を分析し、学力実態やその変容を掌握して研究全体会に情報提供。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 全国標準学力検査（NRT）の結果（偏差値）から見た成果

| 14年度 | 知能 | 5科平均 | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 | <14年4月実施> |
|------|------|------|------|------|------|------|------|-----------|
| 1年 | 54.3 | 51.7 | 52.7 | 49.0 | 51.1 | 53.7 | - | - |
| 2年 | 未実施 | 53.2 | 54.6 | 51.7 | 52.5 | 54.6 | 52.7 | |
| 3年 | 56.0 | 53.3 | 53.2 | 53.0 | 53.0 | 54.5 | 52.3 | |
| 全校 | 55.1 | 52.7 | 53.5 | 51.2 | 52.2 | 54.3 | 52.5 | |

| 15年度 | 知能 | 5科平均 | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 | <15年4月実施> |
|------|------|------|------|------|------|------|------|-----------|
| 1年 | 55.3 | 54.7 | 52.7 | 55.5 | 54.4 | 55.8 | - | - |
| 2年 | 未実施 | 52.9 | 53.7 | 55.3 | 50.0 | 55.7 | 49.9 | |
| 3年 | 54.4 | 54.9 | 53.2 | 54.8 | 54.1 | 58.1 | 54.5 | |
| 全校 | 54.8 | 54.2 | 53.3 | 55.2 | 52.8 | 56.5 | 52.1 | |

考察

相対的に本校以上の成績をおさめている学校は多数あるわけだが、フロンティア事業に取り組んだことによる変容に着目して考察を進めたい。

いずれも4月上旬に実施した結果である。14年度からフロンティア事業の指定を受けたので、1年目の取り組みの成果は15年度4月の結果に出ていると見ることができる。単純に全校の5教科平均を比べただけでも、1.5ポイント上昇している。

14年度の1年生が2年生に上がったとき（の行どうして比較したとき）、国・社・数・理の4教科中3教科で学力の向上が認められる。特に社会科では6.5ポイントも上昇している。5教科平均では、1.2ポイント上昇している。

14年度の2年生が3年生に上がったとき（の行どうして比較したとき）、国・社・数・理・英の5教科中4教科で学力の向上が認められる。特に理科では3.5ポイント上昇している。5教科平均では、1.7ポイント上昇している。

14年度は、全校的に学力が知能に追いついていない傾向が強かったが、フロンティア事業に取り組んだ1年後の15年度はほぼ知能に見合った成績を引き出しているといえる。

(2) 観点別評価テスト（CRT）の結果から見た成果 <16年1月実施>

| 観 点 | | 本校 | 全国 | 比較 |
|--------|------------|------|------|------|
| 国 語 | 関心・意欲・態度 | 66.6 | 67.3 | -0.7 |
| | 話す・聞く能力 | 76.9 | 74.7 | +2.2 |
| | 書く能力 | 70.8 | 66.3 | +4.5 |
| | 読む能力 | 65.4 | 63.0 | +2.4 |
| | 知識・理解・技能 | 72.3 | 68.2 | +4.1 |
| 社会 | 関心・意欲・態度 | 66.4 | 70.5 | -4.1 |
| | 社会的な思考・判断 | 59.9 | 60.0 | -0.1 |
| | 資料活用の技能・表現 | 75.8 | 72.5 | +3.3 |

| | | | | |
|----|-------------|------|------|------|
| | 知識・理解 | 68.1 | 65.2 | +2.9 |
| 数学 | 関心・意欲・態度 | 66.2 | 67.8 | -1.6 |
| | 数学的な見方や考え方 | 61.2 | 57.0 | +4.2 |
| | 数学的な表現・処理 | 78.7 | 71.5 | +7.2 |
| | 知識・理解 | 74.3 | 71.1 | +3.2 |
| 理科 | 関心・意欲・態度 | 82.6 | 80.3 | +2.3 |
| | 科学的な思考 | 84.0 | 77.1 | +6.9 |
| | 観察・実験の技能・表現 | 79.7 | 74.4 | +5.3 |
| | 知識・理解 | 78.5 | 73.0 | +5.5 |
| 英語 | 関心・意欲・態度 | 69.7 | 70.5 | -0.8 |
| | 表現の能力 | 56.2 | 55.5 | +0.7 |
| | 理解の能力 | 76.4 | 71.3 | +5.1 |
| | 知識・理解 | 62.9 | 59.1 | +3.8 |

この報告書を作成する時点では、1年と2年がC R T未実施のため、第3学年についてのみ掲載した。

考察

5教科合わせて21観点項目のうち、全国平均よりも劣るのは5項目だけであり、それも社会科の関心・意欲・態度を除けば1ポイント前後のわずかな差である。逆に、全国平均を上回っている項目のほとんどは4～5ポイント程度の大きな差をつけて上回っている。特に、数学の「数学的な表現・処理」では+7.2ポイント、理科の「科学的な思考」では+6.9ポイントと、全国的に危惧されている理数離れとは逆行する高い成果をあげている。

全国平均を下回る5項目のうち4つが「関心・意欲・態度」に関する項目である。関心・意欲・態度に関する低迷は、ほとんどの教科に共通する本校の課題と言える。

(3) これまでの取り組みと成果の関連

数学では、単元にもよるが、導入段階における問題解決場面でのつまずき具合に応じて1クラスの生徒を2つの習熟度別学習集団に分け、後半を2人の教師で別々に指導することできめ細かな指導を行ってきた。この指導形態がとれないときでも、いわゆる1C2Tのチームティーチングを可能な限り展開しており、生徒のつぶやきや疑問をできるだけ拾いあげ、それに応えられるよう努めてきた。これらが成果につながったものと考えられる。

社会科では、毎時間のように手作りワークシートを配布してきめ細かな指導に努めている。それにより、生徒は授業の流れや重要ポイントをつかみやすくなっている。またワークシートにはその授業における評価の方法や基準などのポイントが記載されていることも多く、頑張りどころを逃さず学習に励むことができるよう工夫されている。また、授業だけでは完成できなかったワークシート類はそのままにせず、昼休みなどを利用して個別指導が受けられるような体制をとっており、これらの積み重ねが成果につながったものと考えられる。

理科では、前時までの学習内容の小テストをできるだけ回数多く（週に1回以上）取り入れ、その累積データを生徒に還元することで学習意欲を引き出す工夫をしてきた。累積正答率80%以上でA、50%以下ならCというようにこの小テスト部門での明確な基準を年度始めに提示しておき、評価Cの生徒に対しては学期途中の休日や長期休業を利用して補充学習を施すことできめ細かな指導に努めてきた。生徒は毎回、その時点における自分の学習達成度をはっきり自覚できるため、非常に意欲的に学習するようになる。意欲が高まれば自然に理解力や思考力も高まるもので、この取り組みが功を奏したものと考えられる。

英語では、今年度の2学年に対して週3時間のうちの2時間を少人数指導（ときには1C2TのTT）できめ細かに指導してきたが、その成果についての客観的なデータはまだない。しかし、何らかの形で成果が出ているものと期待できる。

2. 今後の課題

- (1) 広義の学力向上を目指して
上記のような学力向上の成果は、授業でのきめ細かな指導や評価活動、その評価の結果を生かした補足的・発展的な指導など、言わば学校での指導の結果によるものである。しかし、生涯学習の観点から考えても、意欲や興味・関心をもって自ら学び、自分の思考力や判断力をもとに獲得したものでなければ本物の「学力向上」とは言い難い。前述のCRT結果を見てもわかるように、今後は自ら学ぶ意欲を高めたり学び方を自分で工夫する力も育て、授業で「教わったことを身につける力」だけではなく、家庭など授業以外の場でも「自ら意欲的に学ぶ力」を身につけさせて本当の学力向上につなげていきたい。この対策として、学習の手引きを作成して家庭での学習の大切さを認識させるとともに、学校でも考える場面や調べる場面など多彩な学習場面を取り入れたより魅力ある授業づくりに努めていく必要がある。
- (2) 過去2年間の成果の融合を目指して
1年目の成果として開発した評定ソフトはそれ単独で動く仕様となっているため、今年度作成した評価基準表との整合性に欠けるという問題点がある。また、評価基準表そのものも、評価A・B・Cの違いの文章表現に曖昧さが残る。この対策として、最終年度は、1年目の成果である評定ソフトと2年目の成果である評価基準表をリンクさせ、評価基準表との照合なくして成績が出ないような関連づけを進めていきたい。そのような明確な評価をするためには、授業でも今まで取り入れていなかったような評価場面を組み込んだり、指導法に工夫を加える必要が生じることになるだろう。このような観点から指導と評価の一体化に努め、さらなる学力向上につなげていきたい。
- (3) 教材の開発に関して
限られた時間での日々の教材研究は、次時の流れづくりのためのささやかなワークシートや評価のためのちょっとした問題作成程度で精一杯であり、手の込んだ教材はなかなか開発できないというのが現状である。しかし、社会科のように、可能な範囲内で作成したちょっとしたワークシートの積み重ねが学力向上に貢献している実践もあるので、他教科にも広めていきたい。
教材開発の難しい現状を打破する強力な学習ソフトが現れた。「e-Library」である。これは、生徒個々の意志でいつでも好きなペースで任意学年の任意単元をヒントや解答・解説付きのドリル形式で学んでいくことができ、その成績も個々に累積されていくというソフトである。補足的な使い方も発展的な使い方もでき、個に応じた指導に対応できる。教材の開発が難しい現状であれば、こうした市販ソフトを活用すること、またそれを活用したことによる学習意欲や学力の変容を検証することも次年度の取り組みの一つに加えていきたい。

学力把握のための学校としての取組

1. NRTの実施(4月)
2. CRTの実施(3月)
3. 資格検定試験(漢字検定、数学検定、英語検定)
4. 校内定期考査(年5回)
5. 漢字コンテスト(年2~3回程度)
6. 計算コンテスト(年2~3回程度)
7. スペリングコンテスト(年2~3回程度)
8. 意識調査(各学期1回)

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・教務主任会での発表.....平成15年5月9日(金)
- ・校長会での発表.....平成15年6月24日(火)
- ・中間発表会.....平成15年11月21日(金)
主に管内の中学校を対象に実施
- ・最終発表会.....平成16年10月19日(火)予定
主に管内の中学校を対象に実施
- ・HPは現在作成中

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無